

2018/09/09

「つまずきの石」

日本にはキリスト教系の学校が数多くあり、また、多くの人々がキリスト教式結婚式を挙げます。ところが、日本のキリスト教人口は1%にも至りません。それは、多くの人々がキリスト教の教えを聞き、つまずいたということの意味します。

つまずきは、クリスチャンの間にも起こります。イエス・キリストが「まことに、まことに、あなたがたに告げます。人の子の肉を食べ、またその血を飲まなければ、あなたがたのうちに、いのちはありません」(ヨハネ 6:53) という説教をなさった時、多くの弟子達が「これはひどいことばだ。そんなことをだれが聞いておられようか」(ヨハネ 6:60) と言って去って行きました。神の教えを聞くと、「つまずき」は誰にも起こり得るものなのです。

■つまずきの石を置く

「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」(ローマ 9:33)

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」(I コリント 1:21)

神は、知恵によってではなく、ただ神を信頼する者が救われるようにするために、わざわざ「つまずきの石」を用意なさったのです。それがイエス・キリストです。

「つまずきの石」とは、神が用意なさった福音は、この世では愚かにしか聞こえないものだという意味です。つまり、多くの人々が「ばかばかしい、嘘だろう？」と言うようなものなのです。

このことを理解するために、次のような物語を考えてみました。

■王からの伝言

むかしむかし、あるところにひとりの貧しい青年がいました。

ある日、青年がいつものように泥まみれで畑から帰ってくると、王様の使いが彼を待ち受けていて、次のように言いました。

「あなたを王女様の花婿としてお迎えに上がりました。どうぞ一緒にお城にいらしてください。」

青年の住む国の王様は、世界で最も大きな国の王であり、絶対的な権力と富を持っていました。そして、その王様には愛してやまない一人娘がおり、青年はその花婿としてお城に迎え入れられるというのです。

こんな話は、見たこともなければ、聞いたこともなく、人の心に思い浮かんだこともない話です。にわかにはとても信じられないことでしたが、王様を相手に「なんの冗談ですか」と聞くこともできません。青年は、王からの伝言を喜ぶどころか、王はどこまで本気なのかと悩み苦しみました。

神が私たちに用意してくださった福音がこのとおりです。

「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」（I コリント 2:9）

人は、ほどほどの内容であれば受け入れることができます。例えば、王の伝言が「あなたはこの村で一番よく働くと聞いたので、ほうびを授けよう」というのであれば、青年は感激し、その言葉を素直に受け入れたことでしょう。しかし、一人娘の花婿に迎え入れたいという話は、ほどほどではなく、度が過ぎています。こんなことを村の人に話しても笑われるだけで、誰も信じてはくれないでしょう。そのため、青年はこの素晴らしい話を、とても信じるができなかったのです。

私たちはどうでしょうか。

■ 神からの伝言

神は、この世界の創造主であり、いかなる王も神の足元にすらおよびません。その神が、私たちに声を掛けてくださり、誰をも平等に受け入れて下さり、24時間いつでも話を聞いてくださり、私たちの喜びを満たそうとし、求めるものは何でも与えよう、私のものは全部あなたのものだと言っておられます。

「あなたがたは今まで、何もわたしの名によって求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるためです。」
(ヨハネ 16:24)

「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。』」(ルカ 15:31)

さらに神は、「わたしはあなたがたを友と呼ぶ」(ヨハネ 15:15) と言い、実際に友となるために、人と等しい姿でこの地に来られました。私たちの友となるために、人が見とれるよう

な見栄えも、神としての輝きも持たず、ただの貧しい大工の息子の姿でこの地上に来られたのです。そして、人々からさげすまれ、のけ者にされ、悲しみの人となり、病を知る大人になりました。彼は本気で私たちの友になりたいと願い、ついには、私たちの罪を背負い死なれました。

「彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。」

(イザヤ 53:2)

「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。」(イザヤ 53:3)

私たちは、イエス・キリストによって、この神からのいのちがけの伝言を受け取りました。それは、あなたがどのような罪を犯そうとも、その罪を赦し、永遠のいのちを与えるという内容です。これはまさしく、運命を共にし、一生寄り添う神の花婿あるいは花嫁として迎え入れたいという申し出にほかなりません。しかし、この申し出は、世の常識では、ばかばかしいと一笑に付されるような話です。度が過ぎる冗談にしか聞こえません。

このように、神からの伝言は、ただ驚嘆するしかない内容です。この「驚嘆」が「つまずき」なのです。ほどほどを越えてしまった話は、ただ「信じる」か「つまずく」かしかなかったりしません。人がイエス・キリストにつまずくのは、「信じる」信仰で神を受け入れようとはせず、人の思いによって神に近づこうとするからです。度を越したキリストの福音が「つまずきの石」になっているのです。

「なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです。彼らは、つまずきの石につまずいたのです。」(ローマ 9:32)

神は、わざわざつまずく話を用意し、自分の知恵で神を知るのではなく、人の知恵には愚かな言葉でもって、信じる者が救われるようになさっているのです。

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。」(I コリント 1:21)

【つまずく理由】

(1) 自分を捨てられないから

「ですから、私たちは今後、人間的な標準で人を知ろうとはしません。かつては人間的な標準でキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

(Ⅱコリント5:16)

人がイエス・キリストにつまずくのは、人間的な標準でキリストを理解しようとするからです。「信じる」とは、自分のいのちを自分で救うことはできないと悟り、神の前にへりくだって、自分のいのちを神にゆだねるということです。これが「自分を捨てる」ということです。それがキリストを信じるということであり、かえって自分の「いのち」を見出すことにつながるのです。

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」(マタイ 16:24-25)

「キリストについて行きたい」とは、「神の言葉を信じたい」ということです。それには、自分を捨てる必要があります。自分を捨てることなく「人間的な標準」で自分を救おうとすると、反対にいのちを失うことになると思います。

(2) 人の目が気になるから

「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」(マタイ 13:22)

つまずきの第二の理由は、「この世の心づかい」と「富の惑わし」です。見える安心を得ようとする、見たことも聞いたこともない話にはつまずいてしまうのです。見える安心として最大の力を発揮するのが、人から良く思われることです。人から認められることは、どんな富を手に入れることよりも安心できます。それを得るために、人の目を気にして「この世の心づかい」に精を出し、「人間的な標準」を大切にします。

「人間的な標準」は、度を過ぎない「ほどほど」が大切です。度が過ぎると周りから変な目で見られるため、人の視線を恐れて、御言葉に驚嘆するだけで、信じようとはしないのです。つまり、神の言葉につまずき、人から良く思われる方を選択するのです。

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思っはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。」(マタイ 10:34-36)

これまで、なんと多くの人が、家族の賛成を得られずにバプテスマを断念してきたことでしょう。「この世の心づかい」が、イエス・キリストを信じる告白を妨げているのです。イエス・キリストは、家族の賛同や人から認められることを優先してはならないことを教えるために、「家族の者がその人の敵となります」とキリスト教の教えはあえてつまづくようになっていると言われました。

(3)「死の恐怖」の奴隷だから

人は皆、安心を得るために、人から認められたいと願っています。それは、不安だからです。人間は神に似せて造られていますから、魂は神の永遠性を知っています。しかし、現実には有限性でしかない「死の体」を持っているため、永遠性を知る「心」と有限性でしかない「死の体」の両方を持つという自己矛盾を抱えることになり、それが心の中に不安を生み出します。

「私には、自分のしていることがわかりません。私は自分がしたいと思うことをしているのではなく、自分が憎むことを行っているからです。」(ローマ 7:15)

この「不安」は、潜在意識の中にあるので、普段は意識されることがありません。「不安」は、この地上で見える「困難」と結びついた時、「恐怖」となって表面に現れます。

この地上で出会う最大の「困難」は「死」です。人は、どうやっても「死」を回避することができません。そこで、潜在意識の中にある「不安」は、「死」という困難と結びついて私たちをおびえさせます。そのため聖書は、私たちを「一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々」(ヘブル 2:15)と呼んでいます。

自分を捨てられないのも、人の目が気になるのも、根底にあるのは「不安」です。そして、私たちが具体的に認識できる「不安」の最たるものは、「死の恐怖」だということです。「死の恐怖」を乗り越えるものは、信仰しかありません。どうすれば信じることができるか、そこに必要なのは、「感激」です。

■感激こそ信仰

「死の恐怖」に勝利するのは、「感激」です。神からの伝言(福音)を聞き「感激」すること、それが信じるということです。「感激」こそが、信じる力となるのです。

幼子は、神の福音を聞くと、目を丸くさせながら「感激」し、そして「イエス様を信じます」と告白します。イエス・キリストは、次のように言われました。

「しかしイエスは、幼子たちを呼び寄せて、こう言われた。「子どもたちをわたしのところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです。まことに、あなたがたに告げます。子どものように神の国を受け入れる者でなければ、決してそこに、入ることはできません。」(ルカ 18:16-17)

「信じる者だけが救われる」、これが神の意志であり、神の計画です。信じるとは、「罪を赦し、救ってくださる」という神の伝言を聞き、その話に「感激」し、自分で何とかしようとする生き方をやめ、神の前に自分をゆだねることであり、自分を捨て、神にあわれみを乞うことです。つまり、神の伝言を聞き、それに応答するということです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

ですから、キリスト教は、「つまずきの石」でなければならないのです。「つまずきの石」であるからこそ、信じることが求められます。もし、つまずくことなく最初から受け入れられるようなものであれば、信仰は必要なく、救いもありません。

罪の反対は「信仰」、つまり信じることです。罪を犯すとは「神と異なる思い」を持つことであり、それは神の思いである御言葉につまずくということを意味します。罪と戦うとはつまずきとの戦いです。

この戦いに勝利するには、感激するしかありません。驚嘆したときに、「嘘でしょう？」と言ってそれを拒むのではなく、「すごい！」と感激して受け取るのです。感激することが信仰です。

イエス・キリストを信じた時、そこには感激があったはずですが、あなたは、それを忘れ、いつのまにか古い自分に戻って、信仰をぐらつかせてはいないでしょうか。

つまずくということは、神の言葉を愚かだと言っているということです。しかし、人間にとって、愚かでない言葉は、人を救うことはできません。神の言葉は、そこに信仰を生じさせるために、初めから人間がつまずくようになっているのです。

人間はどんなに自分で自分をなんとかしようとしてもどうにもできません。死の恐怖があることを認め、助けてほしいと信じ願うなら救われます。信じることで、私たちが死の恐怖から解放し、不安から解放し、自分で自分を救おうとすることから解放し、人の目を気にすることから解放します。信じることで、自分が新しく造られた者と知り、変えられていくのです。